

倉吉方言の文末詞について

ーガ・ガア・ガナ・ガン为例にしてー¹⁾

小矢野哲夫

キーワード：倉吉方言、方言文末詞、ガ・ガア・ガナ・ガン

要旨

鳥取県倉吉方言の方言文末詞「ガ・ガア・ガナ・ガン」について、内省に基づいて接続形式を網羅的に記述することを主眼とした。この結果、文末詞が付く文に「記述」としてはたらくタイプと「説明」としてはたらくタイプの二種類があることが分かった。「記述」の文は、共通語の「のだ」に相当する「ダ」を持たない文であり、「説明」の文は「ダ」を持つ文である。「記述」の文に付く文末詞は、聞き手にとって未知の命題内容を発話の場に出すもので、第一発話になることができる。「説明」の文に付く文末詞は、聞き手にとって既知となった「記述」の文に描かれた命題内容を「説明」するもので、第一発話になることができない。文末詞が付いた文の伝達態度は「記述」の文に付くか「説明」の文に付くかの別によって決まる。さらに命題内容や発話状況によって様々に実現する。

はじめに

筆者の母方言である鳥取県倉吉方言について、「ガ・ガア・ガナ・ガン」(以下、カタカナで表記する)という方言文末詞を扱う(共通語では「ではないか(じゃないか)」「よね」に相当する)。

ただし、本稿は倉吉方言の実態を示すものではない。筆者の記憶の中に、いわば化石的に残っている方言である。実際に使用していたのは1960年代、小学校高学年から大学に入学する1969年までである²⁾。使用経験には、同年の人、親や親戚、学校の教師、近所の大人などが使用していた表現の記憶も含まれる。

このような方法は方言研究において一般的ではないかもしれない。しかし、一人の個人の表現・理解といった運用から帰納したものとして、意味があると考え。例えば、何度か引越しをしてその土地の方言に接してはいるけれど、自分の記憶にある母方言はその影響をあまり受けていないと思われる。そして、筆者が使用していた当時の倉吉方言の原型を残しているのではないか。

空白の半世紀の間に倉吉方言において変化した部分と突き合わせることによって、変化を捉えることができるかもしれない。現在倉吉の高校生が使用している方言や、筆者と同世代の倉吉在住者が使用している方言と比較して世代差や時代差を捉えることができる。また、

性差を捉えることもできるだろう。

実態を示す代わりに、内省に基づいて可能性のある接続形式を網羅的に記述する。このことによって、当該の方言文末詞の用法を包括的に示すことが期待できる。

1. 先行研究

倉吉方言が研究の対象になることは多くない。そんな中であって、室山敏明³⁾ (1998) は倉吉方言についてもアウトラインを記述している。文末詞としての形式が挙げてあり、「単純感声的文末詞」の一つに「ガナ (ー)」を挙げ、「転成文末詞」の一つに「ガ」を挙げている。

本稿に関係する研究に、地域は異なるが倉吉方言と共通点があると考えられる、鳥取市方言を扱った浅尾いずみ (2001)、鳥根県松江市方言を扱った松丸真大 (2005) がある。

浅尾が調査対象とした人は 1977 年生まれ、1964 年生まれ、1949 年生まれである。松丸が調査対象としたのは 1982 年生まれの人である。

両者の研究において、倉吉方言と異なる記述が行われている部分があるので、世代差なのか、地域差なのかを検討してみたい。

2. 倉吉方言の方言文末詞

言うまでもなく方言文末詞は藤原与一 (1972) によって提唱された用語である。今日のな用語で言えば文末のモダリティ形式に相当する。

藤原 (1972) から引用する。

文表現の訴え 「訴え」は、表現者にとって本然のことと見られる。方言会話の世界を見ると、方言人たちは、たがいに文 (センテンス) を表現して会話し、その文を以て、何かをつねに相手に訴えている。はたらきかける訴え、反応する訴え、会話者はみな訴えている。老若男女、これに変わりはない。(p.2)

方言文末詞は文の末尾に位置して話し手の、聞き手に対する伝達態度を表す形式である。倉吉方言では、本稿で扱う、ガ・ガア・ガナ・ガンが方言文末詞に該当する。ほかにも (知らん) ニ、(知らん) ケ、(知らん) ワイ、(知らん) ナア、(知らん) シ、(知らん) ダンなどがある。

3. ガ・ガア・ガナ・ガンが付く形式

先行研究において概略が示されているが、できるだけ多くの形式を記述しておく。述語の語彙的な意味などによって文のモダリティ的な意味に違いが出てくる場合がないとは言えないからである。

ガ・ガア・ガナ・ガンは発話意図からする文類型では平叙文に付く。すなわち動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文などの平叙文の主節に付く。共通語での意味は、浅尾（2001）、松丸（2005）が指摘しているように、およそ「ではないか（じゃないか）」「よね」に相当する。以下、方言形の後ろの（ ）内に共通語での対応表現を示す。

3.1 断定を表す平叙文

動詞述語文（受身「ほめられる」「おこられる」など、使役「走らす」「食べさす」「来さす」などを含む） 荷物なら昨日出いたガ・ガア・ガナ・ガン。（出したじゃないか）

荷物ならあした出すガ・ガア・ガナ・ガン。（出すよ）

イ形容詞述語文（希望「したい」「してほしい」を含む） 狭いガ・ガア・ガナ・ガン。

ナ形容詞述語文 えらい静かなガ・ガア・ガナ・ガン。

名詞述語文 あしたは雨だガ・ガア・ガナ・ガン。

3.2 推量を表す平叙文（推量形にはガンが付かない）

動詞述語文 荷物なら昨日出いたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。（出したろう？）

荷物ならあした出すたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。（出すんじゃないの？）

イ形容詞述語文 狭いたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。

ナ形容詞述語文 静かなたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。

名詞述語文 あしたは雨たらあガ・ガア・ガナ・*ガン。

3.3 評価を表す平叙文

行かなあいけんガ・ガア・ガナ・ガン。（行かなければいけないじゃないか）

行かなあいけんたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。（行かなければいけないだろう）

行かあでもええガ・ガア・ガナ・ガン。（行かなくてもいいじゃないか）

行かあでもええたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。（行かなくてもいいだろう）

行かれんガ・ガア・ガナ・ガン。（行ってはいけない）

行かれんたらあガ・ガア・ガナ・*ガン。（行ってはいけないだろう）

3.4 蓋然性・証拠性を表す平叙文

行くかもしれんガ・ガア・ガナ・ガン。（行くかもしれないじゃないか）

雨が降りさあなガ・ガア・ガナ・ガン。（雨が降りそうじゃないか）

だんだん慣れて来たげなガ・ガア・ガナ・ガン。（慣れて来たようじゃないか）

でこさんみたいなガ・ガア・ガナ・ガン。（お人形さんみたいじゃないか）

4. ガ・ガア・ガナ・ガンが付かない形式

ガ・ガア・ガナ・ガンは疑問文、命令文、依頼文、禁止文には付かない。

4.1 動詞述語文の疑問文

荷物はいつ出す*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

荷物は午後に出すか*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

荷物はいつ出いた*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

昨日出いたか*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

4.2 イ形容詞述語文・ナ形容詞述語文の疑問文

どこが安い*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

面白いか*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

便利なか*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。

4.3 命令文・依頼文

出せ*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(出せ)

出せいや*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(出せよ)

出しない*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(出しなさい)

出しといて*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(出しておいて)

出しといて一な*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(出しておいてね)

出しといてごしない*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(出しておいてください)

4.4 禁止文

まんだ出すな*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(まだ出すな)

まんだ出しなんな*ガ・*ガア・*ガナ・*ガン。(まだ出しなんな)

4.5 ガンだけに見られる制限

ガンだけに見られることとして、推量形（普通体「だらあ」も丁寧体「でしょう」も）と丁寧体（動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞）には付かないという制限がある。（9.2 で再度言及する。）

遅れるだらあ／でしょうガ・ガア・ガナ・*ガン。

狭いだらあ／でしょうガ・ガア・ガナ・*ガン。

静かなだらあ／でしょうガ・ガア・ガナ・*ガン。

あしたは雨だらあ／でしょうガ・ガア・ガナ・*ガン。

見ますガ・ガア・ガナ・*ガン。

見ましたガ・ガア・ガナ・＊ガン。
寒いですガ・ガア・ガナ・＊ガン。
静かなですガ・ガア・ガナ・＊ガン。
子どもですガ・ガア・ガナ・＊ガン。

5. 文末詞とイントネーション

ガ・ガアは上昇調イントネーションで発話され、ガナ・ガンは下降調イントネーションで発話される。「↑」と「㇔」は上昇調イントネーションを示し、「㇔」はガアの二拍分を低高のように発音することを示す。「↓」は下降調イントネーションを示す。

ええガ。↑ 高低高 上昇調イントネーション
ええガア。㇔ 高低低高
ええガナ。↓ 高低低低 下降調イントネーション
ええガン。↓ 高低低低

ガナア（低高低）と発音する形式があるが、これは詠嘆的な気持ちを伴い、ケドナアと置き換えられ、ガナとは異なるものである。

あしたは雨が降らなええガナア。↓（明日は雨が降らなければいいんだけどなあ）
昨日まであったガナア。↓（昨日まであったんだけどなあ）

6. イントネーションと文の意味

すでに言及していることであるが、文末詞を伴う文は 5. で述べたように、イントネーションの区別がある。「ひんがわるい」（恥ずかしい）と「うれしい」「勝手にする」「そらええ」（それはいい）を例にとって種々の述語形式と、その共通語での意味を記しておく。

ひんがわりいガ。↑（「品が悪い」恥ずかしいじゃないか）
ひんがわりいですガ。↑（恥ずかしいんですよ）
ひんがわりいだらあガ。↑＝ひんがわりいだら↑（恥ずかしいだろ↑、恥ずかしいじゃないか）
ひんがわりいだらあガア。㇔（恥ずかしいだろ↑）
ひんがわりいでしょうガ。↑（恥ずかしいんでしょうね）
ひんがわりいでしょうガア。↑（恥ずかしいんでしょうね）
ひんがわりいガナ。↓（恥ずかしいじゃないか）
ひんがわりいガン。↓（恥ずかしいじゃないか）
ひんがわりいですガナ。↓（恥ずかしいじゃないですか↓）
うれしいガ。↑（うれしいじゃないか）
うれしいですガ。↑（うれしいんですよ）
うれしいだらあガ。↑（うれしいだろ↑）

うれしいだらあガア。↗ (うれしいだろ↑)
 うれしいでしょうガ。↑ (うれしいでしょうね)
 うれしいでしょうガア。↑ (うれしいでしょうね)
 うれしいガナ。↓ (うれしいじゃないか)
 うれしいガン。↓ (うれしいじゃないか)
 うれしいですガナ。↓ (うれしいじゃないですか↓)
 勝手にすらあええガ。↑ (「勝手にすりゃあ」の形もある。勝手にしたらいいじゃない)
 勝手にすらあええガア。↗ (勝手にしたらいいじゃない)
 勝手にすらあええガナ。↓ (勝手にしたらいいじゃない。「勝手にする」の語彙的な意味に影響されて、相手を突き放した感じを伴う。)
 そらええガナ。↓ (「そりゃ」の形もある。それはいいじゃない)
 勝手にすらあええガン。↓ (勝手にしたらいいじゃない)
 そらええガン。↓ (それはいいじゃない)

7 語のアクセント型と文末詞のアクセント

文末詞ガが名詞や動詞に付くときには「だあガ」の形もある。これは文末詞が付く名詞や動詞のアクセントの型と関係がある。7.1、7.2 に示すように、アクセント型で頭高、中高、尾高の語に付くときは「だガ (低高)」となり、平板の語に付くときは「だあガ (高低高)」となる。

7.1 だガ↑ (低高)

- 1 拍名詞頭高 絵、木、酢、手、二、齒、火、目、湯、輪 例：えだガ高低高
- 2 拍名詞頭高 鯉、夜、朝、山羊、空、おせ (大人の意) 例：こいだガ高低低高
- 2 拍名詞尾高 池、昼、山、草、嘘、背戸、伊木 (地名) 例：いけだガ低高低高
- 3 拍名詞頭高 雀、烏、大瀬 (地名)、田後 (地名)、例：すずめだガ高低低低高
- 3 拍名詞尾高 山根、三朝 (地名)、長瀬 (地名) 例：やまねだガ低低高低高
- 3 拍名詞中高 おはら、あげい 例：おはらだガ低高低低高
- 2 拍動詞頭高 ある、書く、来る、飲む、会う、食う、脱ぐ、漕ぐ、這う、縫う、
付く、むく、刺す、立つ、待つ、勝つ 例：かくだガ高低低高
- 3 拍動詞中高 走る、焦る、会える、書ける、碎く、かぶる、読める、飲める、作る、
泳ぐ 例：はしるだガ低高低低高

7.2 だあガ↑ (高低高)

- 1 拍名詞平板 柄、胃、蚊あ、毛え、血い、葉、実い 例：いだあガ低高低低、
ちいだあガ高高低低高

- 2 拍名詞平板 ぶと（ブユのこと）、牛、豚 例：ぶとだあガ低低高低高
- 3 拍名詞平板 畑、松田、山根（人名）、小谷、八屋、だらず（愚か者の意）
こだに やつや
 例：はたけだあガ低低高低高
- 2 拍動詞平板 聞く、咲く、言う、買う、吸う、めぐ（壊すの意） 嗅ぐ、舞う、行く、
 する（行うの意）、ごす（くれるの意）例：きくだあガ低低高低高
- 3 拍動詞平板 登る、下る、探す、飛ばす、違う、言える、開ける
 例：ちがうだあガ低低高低高

8. 「だ」の有無

倉吉方言には筆者が過ごしていた 1960 年代、ノダ文が発達していなかった。文章を書くときには「ノダ」「ノデアル」「ノデハナイカ」「ノダロウ」など、ノを含む表現を使っていたが、日常的な会話では使わなかった。「行くノデハナイカ」「行ったノデハナイカ」はそれぞれ「行くでないか」「行ったでないか」の形になる。動詞の丁寧形でもノがない。「行くです」「行っただす」「行っただないでしょうか」（行ったのではないのでしょうか）などのように使う。イ形容詞文では「寒いだ」「寒かっただ」のように使い、ナ形容詞文では「静かなだ」「静かなかっただ」のように使う。

形式的にはノが使われないが、次に示す表現の右側の例文にあるダがノダに相当する機能を持っている。「そこにあるだ」は共通語の「そこにあるんだ」に相当する。ダのない左側の例文において文末詞ガなどは、共通語のジャナイカにはほぼ相当する。他方、ダのある右側の例文において文末詞ガなどは、共通語の終助詞ヨに相当する。つまり、文末詞ガなどは、その前にダがあるかないかによって伝達態度に差があるということになる。ダがない場合は判断を加えない「記述」の文として使い、ダがある場合は判断を加えた「説明」の文、「説明」としてはたらいっている文として使うと考えられる。（このことについては 12. で詳しく述べる。）

8.1 動詞文の場合

そこにあるガ。↑	そこにあるだガ。↑
そこにあったガ。↑	そこにあっただガ。↑
そこにあるガア。↗	そこにあるだガア。↗
そこにあったガア。↗	そこにあっただガア。↗
そこにあるガナ。↓	そこにあるだガナ。↓
そこにあったガナ。↓	そこにあっただガナ。↓
そこにあるガン。↓	そこにあるだガン。↓
そこにあったガン。↓	そこにあっただガン。↓

8.2 イ形容詞文の場合

寒いガ。↑	寒いだガ。↑
寒かったあガ。↑	寒かっただガ。↑
寒いガア。↗	寒いだガア。↗
寒かったあガア。↗	寒かっただガア。↗
寒いガナ。↓	寒いだガナ。↓
寒かったガナ。↓	寒かっただガナ。↓
寒いガン。↓	寒いだガン。↓
寒かったガン。↓	寒かっただガン。↓

8.3 ナ形容動詞文の場合

静かなガ。↑	静かなだガ。↑
静かなかったあガ。↑	静かなかっただガ。↑
静かなガア。↗	静かなだガア。↗
静かなかったあガア。↗	静かなかっただガア。↗
静かなガナ。↓	静かなだガナ。↓
静かなかったガナ。↓	静かなかっただガナ。↓
静かなガン。↓	静かなだガン。↓
静かなかったガン。↓	静かなかっただガン。↓

8.4 名詞述語文の場合

名詞述語文の場合、非過去形では同じ形になり、区別がない。窓を開けて雨が降っているの気がついて「雨だが↑」と描写することができるし、電話で相手から「今日運動会だっ
てなあ」と聞かれて雨が降っていることを「それが雨だが↑」と説明する。

雨だガ。↑	雨だガ。↑
雨だったあガ。↑	雨だっただガ。↑
雨だガア。↗	雨だガア。↗
雨だったあガア。↗	雨だっただガア。↗
雨だガナ。↓	雨だガナ。↓
雨だったガナ。↓	雨だっただガナ。↓
雨だガン。↓	雨だガン。↓
雨だったガン。↓	雨だっただガン。↓

9 ガンが付く形と付かない形

文末詞ガンは他の3つとは少し異なる振る舞いをする。ガンが付かない場合がある。

9.1 ガンが付く形

(郵便なら) 昨日出いたガン。(昨日出したじゃない。過去の事実の確認を強調する)
すごいガン!! (すごいじゃない! 程度の大きい様子を強調して表出する)
ごっついうるさいガン。(ものすごくうるさいじゃない。同上)
ごっつい静かなガン。(ものすごく静かじゃない。同上)
なんだいや、あしたあ雨だガン。(なんだ、明日は雨じゃないか。確定的な事態を強調して表出する)
行かなあいけんガン。(行かなければいけないじゃない。行為の義務的な実行を強調して表出する)
これらの文にはガ・ガア・ガナも付く。

9.2 ガンが付かない形

4.5 でも言及したが、ガンが付く形との対比において再度言及しておく。

- * 痛いですガン。(丁寧表現には付かない)
- * あした雨だらあガン。(推量表現には付かない)
- * 行きなつたさあなあガン。(行かれたそうじゃない。証拠性表現には付かない)
- * だんだん慣れて来たげなガン。(だんだん慣れてきたようじゃない。証拠性表現には付かない)

10. 文末詞による文の伝達的な意味の違い

ここまでのところでも適宜共通語訳を付けて文の伝達的な意味を示してきた。ここではガとガア・ガナとガンを比べて共通点と相違点を記述する。

10.1 ガとガア

ガとガアは上昇調イントネーションで発話される。ガは単純な上昇調(↑)でガアは低高となる上昇調(↗)である。ガよりガアのほうがいくぶん強調する気持ちが強い。

- これ、ええガ。↑ (これ、いいじゃない)
- これ、ごっついええガ。↑ (これ、ものすごくいいじゃない)
- 何でもええガ。↑ (何でもいいじゃない。投げやりな気持ちを表すことも、適不適を選ばない気持ちを表すこともある。「何でもええ」の意味に左右される)
- どがでもええガ。↑ (どうでもいいじゃない)
- こっちのほうがええガ。↑ (こっちのほうがいいじゃない)
- 勝手にすらあええガ。↑ (勝手にしたらいいじゃない。「勝手にする」ことを容認、放任する気持ちを表す。)
- ええ天気ですガ。↑ (いい天気じゃないですか)

よう降りました（あ）ガ。↑（よく降ったじゃないですか）
えらい台風でしたあガ。↑（ものすごい台風だったじゃないですか）
これ、ええガア。↗（これ、いいじゃない↑）
これ、ごっついええガア。↗（これ、ものすごくいいじゃない？）
何でもええガア。↗（何でもいいじゃない。「何でもええ」の意味に左右される）
どがでもええガア。↗（どうでもいいじゃない）
こっちのほうがええガア。↗（こっちのほうがいいじゃない）
勝手にすらあええガア。↗（勝手にしたらいいじゃない）
ええ天気ですガ。↗（いい天気じゃないですか）
よう降りましたガ。↗（よく降ったじゃないですか）
えらい台風でしたあガ。↗（ものすごい台風だったじゃないですか）

共通語訳ではほぼ「じゃないか」で訳されてあまり大きな意味の違いがないように見えるが、ガアはガに比べて、より強調する勢いがある。

10.2 ガナとガン

ガナとガンを比べると、ガナは普通体でも丁寧体でも使えるのに対して、ガンは丁寧体では使われないという違いがある。このことはガンはガナより荒っぽい印象があることを示していると考えられる。あるいは丁寧体とガンは文体的に適合しないのだと考えられる。

これ、ええガナ。↓（これ、いいじゃない）
これ、ええですガナ。↓（これ、いいじゃないですか）
これ、ごっついええガナ。↓（これ、とってもいいじゃない）
これ、ごっついええですガナ。↓（これ、とってもいいじゃないですか）
何でもええガナ。↓（何でもいいじゃない）
何でもええですガナ。↓（何でもいいじゃないですか）
どがでもええガナ。↓（どうでもいいじゃない）
どがでもええですガナ。↓（どうでもいいじゃないですか）
こっちのほうがええガナ。↓（こっちのほうがいいじゃない）
こっちのほうがええですガナ。↓（こっちのほうがいいじゃないですか）
勝手にすらあええガナ。↓（勝手にしたらいいじゃない）
勝手にすらあええですガナ。↓（勝手にしたらいいじゃないですか）
よう降るガナ。↓（よく降るじゃないか）
よう降ったガナ。↓（よく降ったじゃないか）
これ、ええガン。↓（これ、いいじゃない）
*これ、ええですガン。↓

これ、ごっついええガン。↓（これ、とってもいいじゃない）

*これ、ごっついええですガン。↓

何でもええガン。↓（何でも）いいじゃない）

*何でもええですガン。↓

どがでもええガン。↓（どうでもいいじゃない）

*どがでもええですガン。↓

こっちのほうがええガン。↓（こっちのほうがいいじゃない）

*こっちのほうがええですガン。↓

勝手にすらあええガン。↓（勝手にしたらいいじゃない）

*勝手にすらあええですガン。↓

よう降るガン。↓（よく降るじゃないか）

*よう降りますガン。↓

よう降ったガン。↓（よく降ったじゃないか）

*よう降りましたガン。↓

10.2.1 「だ」「です」が付かない場合

これ、ごっついええガ。↑（これ、とってもいいじゃない／いいね）

これ、ごっついええだらあガ。↑（これ、とってもいいだろ↑）

これ、ごっついええガア。↗（これ、とってもいいじゃない／いいね）

これ、ごっついええだらあガア。↗（これ、とってもいいだろ↑）

これ、ごっついええガナ。↓（これ、とってもいいじゃない）

これ、ごっついええだらあガナ。↓（これ、とってもいいだろ↑）

これ、ごっついええガン。↓（こてとってもいいじゃない）

これ、まんだ使えるガ。↑

これ、まんだ使えるガア。↗

これ、まんだ使えるガナ。↓

これ、まんだ使えるガン。↓

*これ、ごっついええだらあガン。↓

10.2.2 「だ」「です」が付く場合 動詞文の例

「だ」の場合はガ・ガア・ガナ・ガンのいずれも付くが、「です」の場合はガンが付かない。

これ、ごっついええだガ。↑（これ、とってもいいんだよ↑）

これ、ごっついええだガア。↗（これ、とってもいいんだよ↑）

これ、ごっついええだガナ。↓（これ、とってもいいんだよ↓）

これ、ごっついええだガン。↓（これ、とってもいいんだよ↓）
 これ、まんだ使えるだあガ。↑（これ、まだ使えるんだよ）
 これ、まんだ使えるだあガア。↗（これ、まだ使えるんだよ）
 これ、まんだ使えるだガナ。↓（これ、まだ使えるんだよ）
 これ、まんだ使えるだガン。↓（これ、まだ使えるんだよ）
 これ、ごっついええですガ。↑（これ、とってもいいんだよ↑）
 これ、ごっついええですガア。↗（これ、とってもいいんだよ↑）
 これ、ごっついええですガナ。↓（これ、とってもいいんだよ↓）
 *これ、ごっついええですガン。↓（これ、とってもいいんだよ↓）
 これ、まんだ使えるですガ。↑（これ、まだ使えるんだよ）
 これ、まんだ使えるですガア。↗（これ、まだ使えるんだよ）
 これ、まんだ使えるですガナ。↓（これ、まだ使えるんだよ）
 *これ、まんだ使えるですガン。↓（これ、まだ使えるんだよ）

11. 鳥取市方言、松江市方言との対照

浅尾いずみ（2001）は文末詞ガー（本稿のガアと表記するものに相当する）の機能として「鳥取市方言における文末詞ガー」を対象として論じている。ガナとガンは取り上げていない。

この論考を倉吉方言と対照してみると、①ノダ文については鳥取市と倉吉市との間で地域差があるのではないかという問題がある。また、②鳥取市方言でもかつてはノダ文がなかったが、若い世代でノダ文が使われるようになったのだろうかという世代差の問題がある。

さらに、③会話の中に位置づけて分析する場合に、ガーの機能として認めていいのか、ガーが付く前の形式の意味の影響があるのではないかという問題がある。

本節では①と②について観察し、③については次節 12. でコメントする。

浅尾（2001）は、論文の「まとめ」の部分で「また若年層と老年層の発話におけるガーの機能を比較した場合、何らかの相違が生じている可能性も考えられる。」「今後の課題として追究していきたい。」（p.11）と述べて、世代差の可能性に言及しているが、結論は出していない。このことがノダ文の有無についても当てはまるのか当てはまらないのか、分からない。

ただ、「本稿ではガーについてその前接形式に着目し、「のだ」を介さないか（a）、介すか（b）という点で、それぞれその土台になる事柄や知識の性質には以下のような違いが存在すると考えた。」（p.5）という説明から推測すると、鳥取市方言では「のだ文」が存在するものようである。

「文末以外は基本的に共通語で表している。従って、自然談話としては不自然な部分もあるが、読み易さを考慮して共通語に統一する。」（p.2）という方針であるために不自然さを

感じるのでしょうか。例えば、次の(8)から(55)例。例文番号は浅尾(2001)による。下線は本稿の筆者が付した。

- (8) 私のお父さん太っているんだガー (p.2)
- (26) A: でも、うちの子はあんまり食べたがらないんだけど、何でだろう (p.5)
- (29) 大阪に着くガー、阪急宝塚線に乗るガー、それで石橋で降りればいいんだよ (p.6)
- (33) 会社の赤字がね、何億もあったんだガー (p.6)
- (34) 子: 仕方ないガー、部活してたんだから (p.6)
- (51) なんだ、わたしがやればいいんだガー (p.8)
- (55) どの学校に行っても一緒なんだガー、要は自分がどれだけ頑張るかなんだから (p.9)

鳥取市方言ではこのような場合にいつも「ん」が入るのだろうか。共通語だから入っているのだろうか。ここのところがはっきりしない。倉吉方言を観察する本稿では「のだ」がある表現は違和感を覚える。

しかし、ガーの前接形式で、「のだ」を介さないか、介すかという区別に意味を認めて分析している点から、鳥取市方言の、少なくとも1977年生まれ(本稿の筆者とは28歳の年齢差がある)の話者にとっては「のだ」は普通のことであるように推測できる。資料として「中年層談話の話者: A(1964年生まれ、生え抜き、男性)・B(1949年生まれ、県内他市町村出身、女性)・C(1949年生まれ、県内他市町村出身、男性)」の談話を用いているが、「のだ」を介さないか介すかという区別には世代差を見出すデータがない。

「のだ」の使用については、世代差のほかには、鳥取市が、中核市であり県庁所在地であり県の行政の中心地であるといったことが鳥取市方言に共通語化といった影響を与えているのかもしれない。

松丸真大(2005)は鳥根県松江市方言の「ガ系文末詞」(ガ／ガン／ガー)を記述している。例文の中に「のだ」を介したものが使われている。例文番号は松丸(2005)による。

- (37) A: 佐藤さんは確か今年就職したんだ {よね↑／ガ／*ガン↓／ガー↑／*ガー↑}。 (p.69)
- (44) あのときは困ったんだ {*ガ／*ガン↓／*ガー↑／*ガー↓} (p.69)
- (45) いろいろな解決法があると思うんだ {*ガ／ガン↓／*ガー↑／*ガー↓} (p.70)
- (46) 食事だけは自分で作るようにしてるんだ {*ガ／ガン↓／*ガー↑／*ガー↓} (p.70)

標準語(松丸はこの用語を用いている)の「よね」の用法について、必ず「のだ」を伴わなければならないとする文脈での用例である。松江市方言の「ガ系文末詞」が付くかどうかを観察している。松江市方言に「のだ」がないとは言っていない。むしろ、普通に使っているというように読み取れる。若い世代を対象にした調査だからなのか、松江市という都市だ

からなのか、明確には判断できない。

12. 談話の中に位置づけた場合の文の伝達的な意味

浅尾（2001）の議論は鳥取市方言の文末詞ガーについての機能・用法の記述に主眼がある。ガーに「対話において話者が持っているある知識・情報について、聞き手が認識するように要求する機能」と「話者自身の考え・主張を訴えかける機能」の二つを認めることについては基本的に同意できる。しかし、ここまで例示してきた倉吉方言の文末詞の接続形式から推察されるように、ガ・ガア・ガナ・ガンがダを含まない述語形式に付くのかダを含む述語形式に付くのかということが文末詞の機能・用法のカギとなるのではないかと、というのが本稿の見立てである。

これは奥田靖雄（1984）に示されている、「記述」としてはたらいっている文と「記述」された出来事への「説明」としてはたらいっている文とを区別する立場に立っている⁴⁾。

倉吉方言では「ダ」を含まない文が「記述」としてはたらいっており、「ダ」を含む文が、「記述」された出来事への「説明」としてはたらいっている文だと捉えるのである。このような捉えることは、当該の文が、連続する文のどの位置に現れるかを示している。ダを含まない文は「記述」としてはたらいっている文であって、連続する文の第一発話の位置に立つことができる。これに対してダを含む文は「説明」としてはたらいっている文であって、「記述」された出来事への「説明」としてはたらくことからして第一発話の位置には立たないということになる。

二者が会話する場合、第一発話者の第一発話になることができる形式と第一発話にならない形式つまり第二発話にしかない形式がある。

第二発話は、同一話者が連続して発話する時、第一発話に続く第二発話（あるいはそれ以降の発話）として現れる。または、第一発話者の発話を受けて発話するものとして現れる。

ガーに関する浅尾（2001）の結論部分を要約すると、以下のようになる。

知識確認の要求

知識・情報が既知 潜在的共有知識の活性化

昨日学校の帰りに雨が降ったガー

来ていたガー、忘れたの？

だから言ったガー、あの人には気をつけろって

知識・情報が未知 認識の同一化要求

(a) 確認 あそこにポストが見えるガー

(b) 伝達 うちの犬ってかわいいだガー

倉吉方言における筆者の内省では「昨日学校の帰りに雨が降ったガー」と「昨日学校の帰

りに雨が降っただガー」はダの有無によって文の機能的なタイプが異なるものだと考える。「潜在的共有知識の活性化」を認めるためにはダを含む「昨日学校の帰りに雨が降っただガー」にしなければならない。また、「うちの犬ってかわいいだガー」は、「認識の同一化要求」という機能を持っているとも言えるかもしれないが、聞き手にとって「知識・情報が未知」だとは思われない。「うちの犬ってかわいいガー」とは言い難いように思う。「うちの犬」ではなく「あの犬、かわいいガー」と言って「知識・情報が未知」の聞き手の注意を「あの犬」に向け、認識を同一にするよう要求していると考ええる。「うちの犬ってかわいいだガー」は話し手が自分のうちの犬のことをかわいいと思っていることは伝達できるが、この発話の前に当該発話を安定させる別の発話が必要である。そうしないと、聞き手は唐突感を抱き、「認識の同一化要求」も押し付けがましくなる。

浅尾（2001）は発話の意味を各種指摘している。例文に照らしてなるほどと思わせるものもあるけれど、その用法の分類は文末詞ガーの意味というより、ガーが付く命題内容に影響を受けているのではないかと思われる部分もある。例えば、次の記述は個別的な状況や命題内容の影響を受けた解釈ではないかと思われる。ガー自体の機能をとらえたものだと認定するには無理があるのではないだろうか。

(23) はかなりの非難を込めて、聞き手に再認識を迫っている。

(23) [聞き手が話し手の忠告を聞かずに何か失敗を犯したことを知って]

だから言ったガー、あの人には気を付けろって (p.4)

次の例 (23)' では聞き手が話し手の過去の発言を忘れているようなので、聞き手に再認識を迫っているとは言えても、非難を込めているとはいえないと思われる。

(23)' だけこないだも言ったあガー、あの人は信用できるって。(「だけ」は「だから」)

「非難を込めて」という意味はガーが担っているのではなく「だから言った、あの人には気を付けろって」という命題内容から出てくるものだろう。

文末詞が付いた文の伝達態度は「記述」の文に付くか「説明」の文に付くかの別によって決まる。倉吉方言の場合にはこのことを基本として分析するのがよいと考える。さらに命題内容や発話状況によって様々に実現する。

松丸（2005）は談話の展開と言う観点も取り入れてガ系文末詞の緻密な分析を行っている。話し手の認識を発話の場に導入するとか話し手の認識を提示して聞き手の認識を待つといった機能を取り出している。ただ、「松江市方言に近い鳥取市方言にも『ガ』は存在するが（浅尾 2001）、当該方言のものとは用いられ方がかなり異なるように見える。」と述べている。

おわりに

本稿では文末詞が付く形式を網羅的に記述することに紙幅を費やした。これはこれまでの研究ではあまりないことだったのではないかと。12. についてはさらに考察を深めなければならない点が多々ある。今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿は2017年2月18日に鳥取県立倉吉未来中心で行った講演に基づいている。講演で使ったスライドが<http://misc.kankyo-u.ac.jp/~kuwamoto/no1-koyano-ms.pdf>に掲載されている。
- 2) 筆者のプロフィール。1949年6月鳥取県東伯郡北条町生まれ。55年12月まで同県西郷郡西郷村で過ごす。以下の居住歴は、56年1月から69年3月まで同県倉吉市、69年4月から73年3月まで神戸市、73年4月から78年4月まで宮城県仙台市、78年4月から88年10月まで大阪府高槻市、88年10月から現在まで大阪府箕面市。
- 3) 室山敏昭氏は1936年倉吉市生まれ。筆者とは年齢が一回り違う。
- 4) 要旨と8. では便宜的に「記述」の文、「説明」の文と表記した。

参考文献

- 浅尾いずみ（2001）「鳥取市方言における文末詞ガー」『阪大社会言語学研究ノート』3, pp.1-11.
- 奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』1984年12月号
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 藤原与一「方言文末詞（文末助詞）の研究」『広島大学文学部紀要 特輯号2』1972年2月（1982年に春陽堂書店刊）
- 松丸真大（2005）「鳥根県松江市方言のガ系文末詞」『阪大社会言語学研究ノート』7, pp.62-72.
- 室山敏明（1998）『日本のことばシリーズ31 鳥取県のことば』明治書院